神戸大学　一般財団法人 沖縄美ら島財団 Okinawa Churashima Foundation

Press Release
プレスリリース

報道解禁：11 月 27 日 AM 0 時（ 新聞：11 月 27 日付朝刊 ）
この資料は、文部科学記者会、科学記者会、兵庫県教育委員会記者クラブ、神戸民放記者クラブ、大阪科学・大学記者クラブに配信しています。

2026 年 11 月 24 日
国立大学法人 神戸大学
一般財団法人 沖縄美ら島財団

「西表島だけ」から半世紀 ―
宝石のような葉をもつ希少ラン、石垣島の森で見つかる

神戸大学大学院理学研究科の末次健司教授（兼 神戸大学高等学術研究院卓越教授）、株式会社スズヤの鈴木幸路氏、一般財団法人沖縄美ら島財団総合研究所植物研究室の阿部篤志室長・米倉浩司上席研究員の研究グループは、国内ではこれまで西表島だけで知られていた希少なラン「ナンバンカゴメラン」が、沖縄県石垣島にも自生していることを初めて確認しました。

ナンバンカゴメランは、ビロードのような濃い緑色の葉に、銀白色から淡いピンク色の葉脈が走る小型のランです。この仲間は葉の美しさから「ジュエルオーキッド（宝石ラン）」と呼ばれ、愛好家に親しまれています。一方で、国内の自生地はごくわずかです。環境省のレッドリストでは、絶滅の危険性が極めて高い「絶滅危惧IA類（CR）」[※1]に選定され、国内希少野生動植物種[※2]として保護されています。

始まりは2023年、石垣島の渓流沿いの森で見つかった小さなランでした。研究グループは2026年の開花期に再調査し、花のつくりから本種と確かめました。1971年に西表島から初めて報告されて以来、半世紀以上を経て見つかった国内2島目の自生地です。新たに守るべき生育地が加わったこの発見は、地域と連携した保全への大切な一歩です。

本研究成果は、11月27日午前0時に日本植物分類学会の『植物地理・分類研究』に掲載されます。



石垣島で咲いたナンバンカゴメランの花
© 阿部篤志（CC BY）

ポイント

- ✓ 国内では西表島だけで知られていたナンバンカゴメランを、石垣島で初めて確認。半世紀以上を経て、国内 2 島目の自生地に。
- ✓ 自然観察での「気づき」を、開花期の調査と証拠標本で裏づけ、確かな分布記録として残した。
- ✓ 石垣島で確認できた地上の茎は約 30 本、花をつけていたのは 4 本だけ。「発見」を「保全」へつなぐには、継続調査と地域との連携が欠かせない。

研究の背景

ナンバンカゴメラン（*Macodes petola*）は、ジャワ島やボルネオ島、フィリピンなど東南アジアに分布し、湿った森の地面にひっそりと生えるラン科植物です。本種を含むマコデス属の植物は、ビロードのような葉に金色や銀色の葉脈が浮かび上がることから、近縁のアネクトキルス属やルディシア属などとともに「ジュエルオーキッド」と呼ばれ、観賞用としても人気があります。実際に、沖縄県のレッドデータブック（2018 年版）では、園芸目的の採集や自然林の伐採が減少の要因に挙げられています。国内では 1971 年に西表島から初めて報告されて以来、半世紀以上、自生が確認された島は西表島だけでした。

このため、絶滅を防ぐには、知られている生育地を守るだけでなく、まだ知られていない生育地を見つけ出し、確かな記録として残し、保全につなげることも欠かせません。

研究の内容

今回の発見の手がかりは、西表島では本種が大型のシダ「リュウビンタイ類」の株元に生えているという情報でした。鈴木氏はこれを念頭に、石垣島でも似た環境に注意して観察を続けていました。そして 2023 年 4 月、それまで足を踏み入れていなかった渓流沿いの森で、リュウビンタイ類が生える林床に小さなランを見つけました。その場では種類まで分かりませんでしたが、写真を見た末次教授、阿部氏、米倉氏は、ナンバンカゴメランの可能性が高いと判断しました。

とはいえ、葉だけでは確実に見分けられません。正体を確かめる鍵は、小さな花のつくりです。研究グループは花の季節を待つことにしました。必要な許可を得たうえで、2026 年 8 月 2 日、阿部氏と米倉氏が現地を再訪。沢に沿った約 250 m の範囲で地上の茎を約 30 本確認し、そのうち 4 本が花をつけていました。同定の根拠を残すため、証拠標本も採集しました。

調べた株は、地表をはう肉厚な茎とビロード状の葉をもっていました。とくに注目したのは、唇弁と呼ばれる白い花びらです。本種では、多くのランと違って唇弁が花の上側にあり、花が上下逆さまに咲いているように見えます。しかも唇弁は左右非対称にねじれ、付け根が袋状に膨らんでいました。こうした花のつくりや色を、西表島産の植物や海外の記載と照らし合わせ、本種と同定しました。

一方で、葉の模様には興味深い違いもありました。海外の文献によれば、本種の葉では縦に走る主な葉脈どうしを細かな横の葉脈がつなぎ、くっきりとした網目模様を描きます。ところが石垣島の株では横の葉脈が目立たず、網目ははっきりしませんでした。西表島の株の写真にも同じ傾向がみられます。もっとも、学名のもとになった標本の産地であるジャワ島からも明瞭な網目模様を示さない型が報告されており、この違いは現時点では種内の変異の範囲と考えられます。日本の集団の分類上の位置づけは、海外の標本との詳しい比較や DNA 解析で、今後確かめる必要があります。

今後の展開

この発見で、国内の分布に石垣島が新たに加わりました。ただし、今回確認された生育範囲は限られ、花をつけていた茎もわずかでした。新たな自生地が見つかっても、絶滅の危険が去ったわけではありません。研究グループは調査を続け、関係機関や地域の方々と情報を共有しながら、この生育地を周りの環境ごと守ることを目指します。



図 1. 石垣島で確認されたナンバンカゴメラン

沢沿いの林床で花をつけた株（A）。花序には腺毛と呼ばれる細かな毛が密生する（B）。白い唇弁が花の上側に位置し、左右非対称にねじれる（C）。暗緑色でビロード状の葉（D）。葉面には銀白色〜淡いピンク色の葉脈が縦に走るが、それらをつなぐ横の葉脈は目立たず、網目模様は不明瞭（E）。スケールバー：3 cm（A）、1 cm（B）、5 mm（C）、1 cm（D–E）。 © 阿部篤志（CC BY）

注釈

※1　絶滅危惧 IA 類（CR）

ごく近い将来に野生で絶滅する危険性が極めて高い種を示す区分。本種は環境省第 5 次レッドリスト（維管束植物、2025 年）でこの区分に選定されている。

※2　国内希少野生動植物種

種の保存法に基づき、国内に生息・生育する絶滅のおそれのある野生生物から指定される種。本種は特定第一種国内希少野生動植物種に指定され、野生株の採取・損傷は原則として禁止されている。なお、環境省のレッドリストと法令上の指定では「ナンバンカモメラン」の名が用いられているが、本発表では国内からの最初の報告に従い「ナンバンカゴメラン」を用いる。

論文情報

・タイトル

ナンバンカゴメラン（ラン科）を石垣島に記録する

A new record of *Macodes petola* (Orchidaceae) from Ishigaki Island, Okinawa Prefecture, Japan

・著者

末次 健司 (神戸大学大学院理学研究科 / 神戸大学高等学術研究院)、鈴木 幸路 (株式会社スズヤ)、阿部 篤志・米倉 浩司（一般財団法人沖縄美ら島財団 総合研究所）

・掲載誌

植物地理・分類研究 第 74 巻 2 号 219–223 ページ（2026 年）

・DOI

https://doi.org/10.18942/chiribunrui.0742-16

問い合わせ先

＜　研究について　＞

■神戸大学大学院理学研究科 生物学専攻 教授

神戸大学高等学術研究院 卓越教授

末次 健司

TEL：078-803-5713　　E-mail：suetsugu@people.kobe-u.ac.jp

■一般財団法人沖縄美ら島財団 総合研究所 植物研究室　阿部 篤志・米倉 浩司

TEL：0980-48-2266（総合研究所）

＜　報道担当　＞

■神戸大学企画部広報課

TEL：078-803-5106　　E-mail：ppr-kouhoushitsu@office.kobe-u.ac.jp

■一般財団法人沖縄美ら島財団 調査企画広報課

TEL：0980-48-3649　　E-mail：koho3649@okichura.jp